

岡崎市美術博物館ニュース〈アルカディア〉

90
SPRING
2022

ARCADIA

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS



花と鳥のかたち

特任館長 榊原悟

(承前) その曾我派の「鷹の絵」。一体、「鷹図」と云えば「土岐の鷹」と称されるように、美濃の太守土岐頼芸(一五八二)のそれが名高いが、これに加え絵に心得のある、いわゆる武人画家の「鷹図」も少なくない。そこに登場する鷹は、例外もないわけではないが、おおむね放鷹(鷹狩り)用の鷹で、それらが木の枝や止まり木(台架・野架・燈台架など)に留まる姿で描かれたもの(長谷川信春の『伝武田信玄像』に鷹ではないが、そうした鷹狩り用の隼が野架に止まった姿で登場する。像主の愛隼なのだろう)。

これに対し直庵、二直庵のそれは、そうした姿のものもあつたが、むしろ野に生きる姿に描かれた点に特色があつた。そのため鷹が飛び交う広い空間が必要で、当然の如く大画面の屏風絵に優れた作が遺る。例えば、

- ① 『松鷹芦鷺図屏風』 直庵筆
- ② 『松に柏鷺図屏風』 直庵筆
- ③ 『花鳥図屏風』 二直庵筆 東京国立博物館蔵
- ④ 『柏鷹芦鷺図屏風』 二直庵筆 大徳寺蔵

などがある。鷹が白鷺を襲い、巨大な鷲が四ツ足の獣(狼とも)を押さえ込む(図1)。喰うか喰われるか、まさしく野生の営みが展開する。独自の世界を描いたようにも見えるが、類例が全くない、と云うわけでもない。他にも狩野山楽(一五五九〜一六三五)の大覚寺正寝殿鷹の間襖「松鷹図」や『鷲鳥図屏風』などがある。いづれも鷲を追い、雉子を襲い、捕えた小禽を運ぶ鷲鳥(鷹や鷲などタカ科の猛禽の総称)の姿が描かれている。



図1



図2

中でとりわけ注目したいのが、後者の左隻、猿をとらえた鷲である(図2)。後方より襲ったようで、鋭い爪で口元をがっしりと掴む。襲われた動物は異なり、襲った鷲の姿も左右反転しているものの、同様の鷲が④の右隻にも登場する(図1)このことに気づいた川本桂子氏は、当時こうした鷲の図様が戦国武将たちに人気を博していたことと、そうした鷲の図像情報の原因となった可能性が高いものとして、狩野探幽(一六〇二〜七四)が、祖父永徳の作とみて模写した「鷲鳥図」(図3 大和文華館本『探幽縮図』のうち)を紹介した(川本桂子「鷲鳥図屏風・作品解説」『友松・山楽』新編名宝日本美術 一九九一年)。捕獲された猿の姿は異なるが、鷲の姿態や背景の樹木のあしらいには類似性が強く、山楽の『鷲鳥図』に、この永徳画からの影響は疑いない。

そのことを踏まえ川本氏は、さらに、こうして鷲が獲物を捕まえた緊張の一瞬を描いた先行作品として、明代の画家林良の『鷹雉子図』(貝塚家蔵)を上げ、永徳ら桃山の絵師たちは、こうした明の水墨系花鳥図から図様を引いた可能性が強い、とした(川本氏前掲書)。実際、他にも雁を襲った鷹の作例も伝わることから(図4 『蒼鷹搏雁図』毛翀筆 東京国立博物館蔵)、図像情報の淵源を中国絵画に求めたことは、卓見と云うべきだろう。

既にわたしたちも、鼯や雀、鷓に蜥蜴など捕食者たちこそ異なるものの、彼らが獲物に狙いを定め、捕える一瞬の姿の図像的淵源を、同じく中国絵画(唐絵)にあるとした。わたしたちの先祖に、そうした光景を見つめること||眼が無い以上、それを絵に取り上げるのはあり得ないため、外的要因を想定せざるを得ず、そこで中国絵画からの図様の引用を考えたのである。これがわたしたちの思考回路であり、小論の命題の一つでさえもあつたはずだ。むしろ川本氏の論理とは異なるだろう。だが異なる思考回路を経ながらも、同じ結論を導き出した事実は重要で、川本説は、わたしたちにとってまさしく追い風、力となる。私たちの推定や、ひいては命題そのものが裏付けられ、たとえ云えるからである。

とは云え、喰うか喰われるか、自然の営みの緊張した一瞬を描いた先行作



図3



図4

品として、林良の『鷹雉子図』を上げるのみと云うのでは不満が残る。現に探幽が先行する鷹の絵を縮小模写した「鷹図巻」（京都国立博物館本『探幽縮図』のうち）には、鴉や鷺などを襲うさまざまな「鷹図」が収められ、その中には山楽『鷺鳥図屏風』の猿を描いた鷺や、林良の『鷹雉子図』に酷似する図も見出せるからである（図5）。船載された「鷹の絵」にもさまざまな図様のものがあつたのだろう。図像情報の淵源はそれらを丹念に探る以外にあるまい。だがいずれにせよ、中国絵画にそれがあることだけは間違いない。

では、蕭白の、あの雉子を猛追する鷹はどうであろうか。研ぎ澄まされたその姿から、範とする原図の存在を予想しておいたはずだ。その予想に違わず、これと寸分変わらぬ姿の鷹が直庵の屏風④の左隻に、また腹側と背側とを反転させたかたちで二直庵の屏風⑤の右隻に、それぞれ登場する。鷹描きを得意とし、自らもそれを標榜したとみられる、曾我派の絵師として蕭白が学んだのは、これではなかったか。先端が分岐した波頭のかたちも④の左隻に見ることができるとはいえない。

つまりバージニア本（ないしは上覧本、或いはそれらの原図となった船載本）から鷹の図像情報を得たのは、直庵・二直庵に他なるまい。そう云えば、直庵には、鷹ではないが、こんな作品もある。

『双鶏養雛図』双幅（図6） 妙心寺 隣華院蔵

雌雄の鶏を描くが、その鋭い目つきは戦う本能もあらわで、戦国時代を生きた鶏はかくやと思わせるに足る。いや、『鳥獣戯画』乙巻に描かれた鶏にも同種の表情があることと思えば、飼ひ馴らされた鶏（庭鳥）とは云え、これこそが野生の本能と云うべきかも知れない。

見て欲しいのは、そこではない。右幅右下、二羽の雛が、無邪気に紋白蝶を襲っている。食べるためではないだろう。野生の本能と云うのだろうか。だが、それだけにいっそ怖い。羽根一枚は引つ剥がされている。まさしく自然の営み。常州草虫画で見た光景だ。直庵がこれに興味を抱き、注目していたことは間違いない。蝶を襲う雛の姿が、それを物語る。低く設定した視点も効果的だ。となれば右幅上部、天蓋のように葡萄の蔓を差し出させたのも、常州草虫画が、同じく葡萄や隠元豆と云った蔓性の植物や柘榴などを画面上部にあしらう、その図様構成に倣ったと見ることで間違いあるまい。



図5



図6

問題は、直庵・二直庵が、そこから鷹の図像情報を得たとみたバージニア本乃至これに係る作例に、何処で接することができたか、である。これに関連して、ここまで敢えて伏せてきたのだが、既にお気付きの方もいるのではないかと。そう、直庵は、なんと、

直庵者 卜三居泉州境 専設色鷹鶴在 爽明也

狩野一溪著『丹青若木集』直庵伝

とあるように、泉州は堺に居たと云うのではないかと。二直庵も含め彼らを「堺曾我派」と呼び、兵部墨谿以下、朝倉氏所縁の歴代を「越前曾我派」として区別することさえ、既に行われている（木村氏前掲論考）。

思い出して欲しいのは、その堺に、当時、土佐光則も居たことだ。『雑画手鑑』に虫たちを描いた土佐光則が、である。そうであればこそ「堺の虫たち」と呼んだのだ。その「堺の虫たち」の二匹の飛蝗（一匹は蝻斯かも）は、バージニア本から飛んで来た、と推定したはずだ。そしていままた、堺曾我派の獲物を追う鷹も、そのバージニア本から飛んで来た可能性が高い、と説いた。全く異なる流派の、異なる絵師が、同じ押絵貼屏風の異なる図から、それぞれ図像情報を得ていた、と云うのである。しかも当の絵師たちは、同じ地・堺に居住していた。となると絵師たちが当該の図像情報を得たのは、それだけの流派が蓄えた粉本を介してとみるより、問題のその押絵貼屏風自体―それがバージニア本なのか上覧本なのか、はたまたそれらの原図となった船載本なのか不明であるが、ともあれその押絵貼屏風そのものが当時堺にあつたのではなかったか。その屏風を、それぞれの絵師が自らの眼で見、必要な図像情報を得た、と。そう考えるのが、むしろ最も自然であるように思う。

堺と云えば、近世初期、納屋衆（会合衆）と呼ばれた有力商人たちの経済力を背景に、武野紹鷗（一五〇二〜一五五五）はじめ千利休（一五二二〜一九二）や津田宋及（一五一九〜一五九一）、今井宗久（一五二〇〜一九三）と云った大茶人を輩出、一大文化都市として繁栄を誇っていたはずだ。その結果、天下の名物・茶器・書画の類が集まっていた。その中に、あの足利軍家所縁とも推定した押絵貼屏風もあつたのではないかと。その押絵貼屏風は当時確かに名物であったのだ、と述べると、まったく、虫の話だけに、虫のいい話ばかりを書き連ねたものだ。そんな与太話は老人の戯言ではないかと、と茶々を入れられそうなので、ここはもう一点、問題の押絵貼屏風との係わりが認められる作品を紹介し、この項の締めとしたい。果たして読者の眼を驚かせ、眼の極楽。大喜利の座布団一枚となりますか、どうか（未完）。

図1 獣を襲う鷺 曾我直庵筆「松に柏鷺図屏風」より

図2 猿を描いた鷺 狩野山楽筆「鷺鳥図屏風」より

図3 「鷺鳥図」 狩野探幽筆「探幽縮図」より

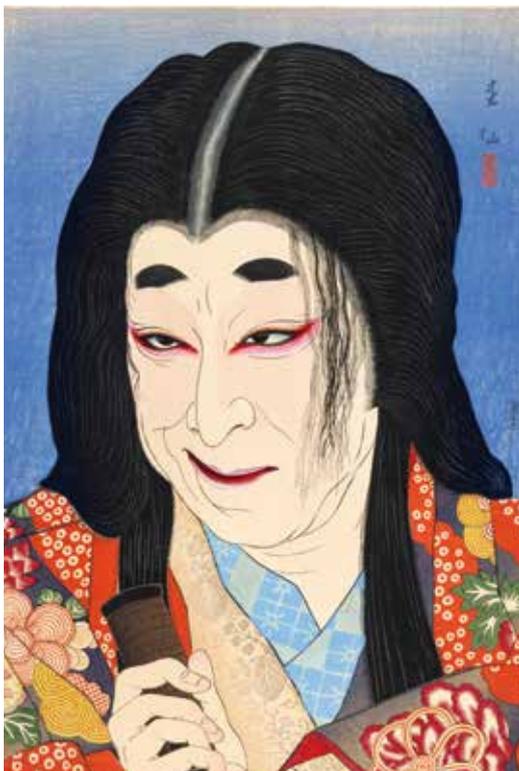
図4 「蒼鷹持雛図」 毛獅筆

図5 猿を描いた鷹 狩野探幽筆「探幽縮図」より

図6 「双鶏養雛図」 右幅（双幅のうち）、曾我直庵筆

名取春仙 役者を描く

会期 令和4年4月9日(土)～5月15日(日)
酒井明日香



《創作版画春仙似顔集 五代目中村歌右衛門 淀君》
大正15年(1926) 岡崎市美術博物館



《創作版画春仙似顔集 七代目松本幸四郎 梅王》
大正15年(1926) 岡崎市美術博物館

展覧会「名取春仙 役者を描く」では、近年人気の「新版画」で多くの役者絵を出版した名取春仙(一八八六～一九六〇)の代表作《創作版画春仙似顔集》《春仙似顔集追加》のすべてと、肉筆画をあわせた合計49点の作品をご紹介します。この49点はすべて当館が近年収蔵した名取春仙の作品で、この春、満を持して一斉にお披露目できることとなりました。常設展示室を持たない当館にとって、収蔵品をご紹介できるまたとない機会です。

初披露ということは作品の調査や展示の蓄積がないので、展覧会の準備も採寸や写真撮影といった細々とした作業からスタートしました。展覧会を開催する話が最初に館内で出たのが二〇二〇年の夏頃で、そこから少しずつ準備を進めてきました。

そんな本展の裏話をふたつほど。まずは、作品に描かれた役者の写真について。本展では、関係各所のご協力により、役者の写真も資料としてパネル展示できることとなりました。春仙は役者絵の制作において、写真を活用していることがこれまで指摘されているので、ぜひ作品と写真を見比べてみてください。残念ながら対応する写真が見つけられていない作品もあり、また今回展示する写真が正解とは言いきれませんが、およそ九割の作品に写真を添えることができました。そしてふたつめは、展示の順番について。

《創作版画春仙似顔集》《春仙似顔集追加》はシリーズ物なので、出版年順や番号順に並べるとするのが最も基本的な方法のひとつかと思いますが、ただ今回、役者の写真を調べていく中で、作品の制作にあたって春仙は単に写真をそのまま絵にするのではなく、随所に創意工夫を加えているのではないかと、思うことが多くありました。そこで本展ではあえて、春仙がどのように役者を描いたのかをひとつのキーワードにして展示順を構成しました。ご覧いただいたみなさまに共感していただけるかどうか；ぜひ展示室でご確認いただけたいと思います。

最後に、「いつか行こう」と考えていたら終わっているのが展覧会。本展は作品保護のため、会期が短めになっています。普段の展覧会であれば、もう少し会期を長く設定して途中で展示替えとすることがありますが、名取春仙と謳って半分以上しかご覧いただけられないのも…ということですが、会期を短くして名取春仙の作品をすべて通期展示いたしました。春仙の美しい役者絵の世界をご堪能いただけましたら幸いです。

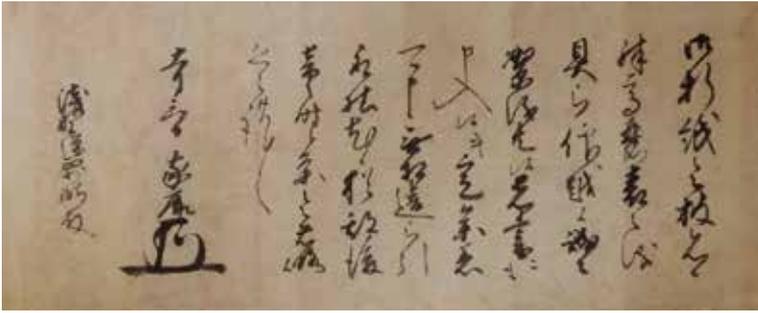
EXHIBITION

ミニ展示

新発見と再発見

湯谷 翔悟

会期 令和4年4月9日(土)～5月15日(日)



徳川家康書状（個人蔵）

この展示は、メインで行う展示の横つちよで小ぢんまり行うモノです。要は刺身のツマのようなモンです。そんな添え物の展示なのに、展示紹介に一頁まるまる貫つてしまいました。畏れ多い。ちなみに私は刺身のツマだと、ピリリと辛い紫色の小つちやい葉のヤツが好きです。

この展覧会は「資料集めるなら展示しなさい」という天の声（仰る通りでございます）を受けて企画しております。展示資料は五点ほど、全て古文書・絵図などの歴史資料ばかりが並びます。お金もかけずに準備するので、まあ地味な展示ではあります。でも展示する資料は、好きな人には喜んでもらえるんじゃないかと思っております。そう思う理由の説明ついでに、資料をばサラッと紹介しますね。

その1（ほぼ）全点初公開！
タイトルのとおり、近年発見されたものばかりなので、初公開資料が並びます。でも、「徳川家康判物」だけは去年の「至宝」展で出しちゃいました。おかげで「全点初公開！」と声高に主張できません。

その2 大名行列図を全面展示！
幕末の岡崎のお殿さま、本多忠民^{ただも}の大名行列図を展示するのですが、これが長さ一四mあります。なので全部一気に展示するのは最初で最後かもしれません（そうじゃなかったらゴメンナサイ）。

その3 未解明なコトだらけ！
展示資料が全て新発見ということ、まだ充分にわかっていないことが多いです。例えば上の「徳川家康書状」。慶長三年（一五九八）の朝鮮出兵からの撤退の時、家康が浅野長政にアてた手紙です。これまで写しで存在は知られていた古文書ですが、その原本が出てきたことで、六文字の抜けがあったことが分かりました。ですがその六文字が何を指すのか：正確なことが分かっています。本当はダメなのでしょうが、展示することで新たな見解が示されることを期待しています。その他の資料も、これからの新説が期待される、イキの良いモノばかりです。見て感じた、皆さまの新見解をぜひアンケート等でお知らせください。

興味が出たら、もし宜しければ足をお運びください。無料です。また、何か大きな力が働かない限り、写真撮影も可になる予定です。そういえば冒頭に書いた好きな刺身のツマですが、思えば何か分かんず食べていたので、ネットで「刺身 つま 辛い」で検索してみました。紅蓼^{べにたて}というらしいです。こりゃ本展にちようど良い。「蓼食う虫も好き好き」と言いますが、本展も物好きな方に楽しんでもらえたら嬉しいです。



本多忠民行列図巻（岡崎市美術博物館蔵）

ただいま、準備中

ルネ・ラリック・アーナル・デコのガラスモダン・エレガンスの美

会期 令和4年6月4日(土)～8月28日(日)

田中 裕紀乃



燭台《トウキョウ》1935年、フィンガーボウル《トウキョウ》1933年、ナイフレスト《ニッポン》1932年 グラス・セット《トウキョウ》1930年



中型常夜灯《キューピッド》すべて北澤美術館蔵、撮影：清水哲郎

ルネ・ラリック（一八六〇—一九四五）は、フランスのシャンパーニュ地方の小さな村アイに生まれました。シャンパーニュ地方と聞いて、ピンときた方、大正解です。シャンパーニュ地方はあのシャンパンの産地として有名な土地です。シャンパーニュ地方はフランスの中でも最北のワイン生産地で、パリから北東約140kmの位置にあります。ちなみに、シャンパンはフランス語で発音すると、「シャンパーニュ」となります。このままシャンパン談義を続けたいところですが、ラリックの話に戻りたいと思います。

ラリックは、アーナル・ヌーヴォーのジュエリー制作者、そしてアーナル・デコを代表するガラス工芸家として、二つの創作分野で頂点を極めた人物です。一九〇〇年のパリ万博でジュエリー作家として脚光を浴びた後、ガラス工芸への道を模索しました。一八九八年からパリ郊外のクレールフォンテーヌに工房を設け、あらゆるガラスの製法に精通した彼は、一九〇九年パリの南東に位置するコンブ・ラ・ヴィルに工場を構えてガラス器の量産を始め、一九一二年暮れに開いたガラス展を境に、宝飾品の制作を離れガラスの制作者となりました。無色透明のガラスは、ラリックの手によって愛らしい花や昆虫、動物などの生き物、神話の登場人物が浮き彫りにされ、美術品にも負けない詩情豊かなものに昇華しました。

花瓶、香水瓶、鉢、置物などに始まったラリックのガラス制作は、室内装飾、野外モニュメント、そして教会の祭壇にまで広がりました。一九二五年「アーナル・デコ博覧会」では、夜間照明付きの野外噴水を立て、建物の内外装にガラスを用いるなど、大胆な着想を実現して見せました。この展覧会は「アーナル・デコ様式」の語源となった展覧会でもあります。ラリックの作品は、装飾美術の価値を芸術の域まで押し上げ、生活に新たな美意識をもたらしました。

本展では、世界屈指のガラス・コレクションを誇る北澤美術館（長野県諏訪市）の豊富なコレクションの中からルネ・ラリックの作品を選びすぐり、ガラス工芸家としての全容をご紹介します。冒頭で少しお話しした「シャンパン」にまつわる作品も展示を予定しています。華やかで洗練されたフランス二〇世紀初頭のモダンな様式美をラリックによるガラス作品を通して是非会場にてご覧ください。

余談ですが、ラリック展は当館初となるガラスの展覧会です。ラリック作品が展示室にていかに美しく輝くのか楽しみにして下さい。

古文書を紐解く「宗門出入願帳」

山下 葵

岡崎市美術博物館には地域の古文書が多く収蔵されています。展覧会ではなかなかお披露目される機会のない古文書たちですが、地域の歴史を叙述していくには欠かすことのできない存在です。

今回紹介するのは「宗門出入願帳」です。江戸時代には「宗門改帳」が行なわれ、人々がどの宗派に属しているかを毎年確認し、「宗門改帳」を作成していました。元々は、キリスト教などの禁じられた宗教を人々が信仰するのを防ぐために行っていたものです、しかし、禁教政策が徹底されキリシタンが発覚しなくなると、住民がどこに住んでいるかを調査する役割が強くなり、「宗門人別改帳」が作成されるようになりました。これは町村ごとに庄屋と呼ばれるその町村のリーダーが作成して、住民の旦那寺や居住地を把握していました。

出入りすること、すなわち引越しすることを意味しています。現在も、引越しに伴って住民票を移動させるのと同じ様に、当時も引越しの時には届出をする必要がありました。内容をみていくと、当時の人々がどのような事情で引越しをしていたのかがわかります。多いのは結婚です。女性が嫁いでいくというイメージが強いかもしれませんが、この「宗門出入願帳」のなかには、男性が婿として引越したという記録も見られます。また、夫婦中が不仲になったとして、離縁して引越した女性も記録されています。その他には、病気を治療するために、名古屋へと移った人や、なかには勘当されてしまった人もいます。

多種多様な理由で、江戸時代の人も引越していたのです。このように、地域の史料を読み解くことで当時の人々の暮らしがわかってきます。古文書の研究には、そんな面白さがあるのです。



宗門出入願帳／矢作町字会蔵

暮らしの道具箱

かわいい子供用お弁当箱

伊藤 久美子



今日のお弁当は何だろう。お弁当は中身も楽しみですが、使い慣れた、あるいはお気に入りのお弁当箱であれば尚更美味しく感じるものです。「弁当」は「便当」、つまり不便の反対語で便利なことという意味で、外出の際に持つて行く食事を弁当と呼ぶようになったものです。弁当と書くのは当て字なのです。弁当とか弁当箱という言葉が使われるようになったのは江戸時代から、とくにサラリーマンという職業が生まれた明治以降のことになります。

今回取り上げるのは子供用のかわいらしいお弁当箱。昭和三〇年代のアルマイト製で、蓋に絵がついています。姉と弟【写真1】、兄と妹【写真2】が幼稚園の頃に買って貰ったものです。思わず懐かしい！と声が出てしまいます。

写真1の姉よりも大きな弟のお弁当箱からは、姉よりもたくさん食べたであろう弟の姿が目に見えます。写真2はアメリカアニメのキャラクター弁当箱。兄妹のお気に入りキャラクターだったのでしょうか。今でもキャラクターグッズとなると値段が高いのですから、当人も人気キャラクターの弁当箱は、きっとそれなりのお値段であったはず。

お弁当を持たされたご本人たちはいづれも六十歳を超えています。幼き頃にワクワクした気持ちと共に持って行ったお弁当箱、よくぞ大切に残されていたものです。

春、新年度を迎え、お弁当デビューされる人もいるのではないのでしょうか。お気に入りのお弁当箱が見つかるといいですね。



写真1



写真2

SHOP INFORMATION



富山県の伝統工芸品「越中和紙」のひとつ、八尾和紙を製造している桂樹舎。独自に開発した強製紙という丈夫な和紙に型染技法を用いて、色鮮やかに大胆な模様を染め付けたものを、暮らしの中で身近に使うことができるアイテムに仕立てています。一つ一つ丁寧に手作業で作られたアイテムは、印刷では出せない温かみのある独自の風合いを生み出し、使い込んでいくほどに柔らかく艶がでてきます。お客様の健やかな成長を願って祝う端午の節句に、お家の中でも気軽に飾れる卓上鯉のぼりもおおすすめです。

営業時間 10:00 - 17:00
 定休日 月曜日(祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります)
 TEL 0564-83-5952
 FAX 0564-83-5953
 MAIL yagura@b-soup.com
 HP https://www.b-soup.com

YOUR TABLE

岡崎市美術館併設のカフェレストラン『YOUR TABLE』。ガラス張りの店内には太陽の光がいっぱい入り、お洒落で開放的な空間が広がります。ランチ時には景色を愉しみながらお食事することができます。展示毎にシェフ考案のコラボメニューも登場。カフェタイムにはケーキセットや軽食などを販売中。

営業時間 11:00～21:00
 定休日 月曜日(祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります)
 LUNCH 11:00 - 14:30 (L.O.14:00)
 TEA 14:30 - 17:00 (L.O.16:00)
 DINNER 18:00 - 21:00 (L.O.20:00) ※金土日祝日のみ営業
 TEL 0564-28-0141
 HP https://your-table.owst.jp

YOU USED TO BE



「ソフト」と聞くと皆さんは何を想像するでしょうか。パソコンのソフトやソフトクリーム、球技が頭に浮かぶ人が多いかもしれません。ところが、一世ほど前の人は帽子のことを思い浮かべたそうです。古い写真の群衆を見ると男性はほとんど帽子をかぶっています。特に着用者が多いのが「ソフト」ことソフト帽子。柔らかかなフェルトの一枚布で出来たもので、身分やシチュエーションを問わず愛用していました。現代のこの手の帽子はあらかじめ折り目をつけた形に成型されたものが一般的ですが、当時は丸い天井のものをへこませて、各自で形をつけていました。裏側に挟んで形を整えるための帽子専用のクリップなどというものも売っていました。値段はピンキリで、巷では羊毛製の国産品が安く手に入りましたが、百貨店に行くと兔毛やビーバーの毛でできた舶来の超高級品が並んでいました。かつて帽子は生活と密接に結びついており、かぶり方によって性格がわかる…とさえ言われていました。老いも若きも愛用した「ソフト」ですが、戦後の目まぐるしい社会の変化の中で廃れてしまいました。かつてはどこの街にも必ず帽子屋さんがありました。最近では珍しくなりましたが、

(米田)

表紙図版：名取春仙《春仙似顔集追加 十五代目市村羽左衛門 助六》(部分)
 岡崎市美術館



岡崎市美術館

開館時間 午前10時～午後5時
 ※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後休日でない日)
 年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

HP https://www.city.okazaki.lg.jp/museum

ARCADIA

OKAZAKI CITY
 MUSEUM
 NEWS

【岡崎市美術館ニュース/アルカディア】 第90号 2022年3月発行
 編集・発行 岡崎市美術館
 〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町幹1番地 岡崎中央総合公園内
 TEL 0564-28-5000(代表)